

## トンネルを抜けると葡萄畑だった — 山国甲斐の大変身 —

甲斐には中央本線、信州主体の小海線、駿州富士市と結ぶ身延線、富士急とわずか四路線\*しか鉄道はない。リニア新幹線目的地の大半は名古屋・大阪。四方山に囲まれた閉ざされた山国。とはいえ甲斐は人材が綺羅星の如く出ている。黒駒勝蔵・金丸某・知事選政争と近年評判は芳しくないが、実は日本史を動かしてきた。甲斐源氏・武田信玄に始まり柳沢吉保・萩原重秀・田沼意次と理財に長けた江戸人は甲州人末裔。近代財界人の多くは甲州人で鉄と深く繋がる。上方は<三方良し>近江商人、東都は甲州商人が幅を利かせていた。

\*:富士急は二路線あるので、正しくは五路線

<三級鉄乗りファン・銭屋小金丸>

### ■地勢および歴史

北は甲武信岳・雲取山に代表される武蔵・信州の山々、東南は丹沢+富士山、西は赤石山脈(南アルプス)、北西には八ヶ岳連峰がそびえる。そうした山々から流れ出た川(笛吹川他)が甲府盆地を作り富士川となって駿河湾に注ぐ。

古代から牧が発達し武士団を形成。戦国期はご存知<風林火山>が四方を圧した。江戸期一時の親藩・譜代を除くと幕府直轄地。十八世紀半ば以降は甲府勤番は<山流し>と言われ退任間近の支配役と不良旗本による甲府番外地。これが甲州商人や豪農層を産んだ。

江戸時代は甲州街道で江戸とつながっていたが交通・物流の中心は富士川舟運。平成二十六年二月十四~十六日、豪雪(甲府一〇四センチ)で中央本線・中央高速・国道は全て途絶し、数日間陸の孤島となった。盆地の夏は東京並みに熱い一方、こうした自然災害が稀に生じる。

甲斐は人口八十一万人、県庁所在地甲府市でも人口二十万足らず<図表1>。農産物はブドウ・モモ、富士山・南アルプスを中心としたミネラル・ウォーターとワイン生産日本一である。かつての金山・判子・ほうとう・信玄餅・水晶からワインの国にブランド大変身。工業では世界有数のロボット企業ファナックが富士山麓に本拠を構える。商圈分析では大月・上野原(旧郡内)は八王子・立川につながる。かつて上野原には旅館が軒を並べていたが、東京通勤圏でいずれも廃業。

### ■甲武鉄道からJR中央本線へ

根津嘉一郎(東武)、小林一三(阪急)、早川徳次(地下鉄)と甲州人と鉄は関係深い。現在の中央本線の元になった甲武鉄道は紆余曲折を経て、<天下の雨敬>甲州財閥の雨宮敬次郎(1846-1911年)を中心に明治二十二(1889)年四月新宿-立川が開業、四ヶ月後には八王子まで延伸。明治三十六(1903)年甲府まで延び、明治四十四(1911)年五月名古屋まで全通した。長さ四百キロ弱の日本を代表する山岳列車。現在東京-塩尻を中央東線、塩尻-名古屋を中央西線と呼ぶものの、東都人にとって東京-高尾は中央線快速電車。中野-立川は珍しく一直線(当時何もなかった)。並走するライバル京王線は甲州街道沿いをクネクネ走ると対象的だ。臨時列車を除い

<図表1>山梨県の主要都市人口

山梨県	81.3万人
甲府市	18.6
富士吉田市	4.7
都留市	2.9
山梨市	3.4
大月市	2.2
韮崎市	2.8
南アルプス市	7.1
北杜市	4.6
甲斐市	7.6
笛吹市	6.8
上野原市	2.2
甲州市	3.0
中央市	3.0

(公益財団法人 国土地理協会2022年4月調査を元に作成)





メートルの大月駅を出発して河口湖駅まで五百メートル登る。富士山の様々な風景を楽しめる。<富士には遊園地がよく似合う>と絶叫マシーン目指す人も少なくない。新宿発特急の一部、三往復がJR・富士急直通「富士回遊」で河口湖まで行く。また大月ー河口湖間を走る豪華列車・富士山ビュー特急も素敵。なを駿州・富士市の岳南電車も富士急グループが経営。

## ■消えた京王の路線延伸

橋本まで延伸した京王は富士山麓まで延びる構想も

あった。バブル崩壊・人口減でそうした計画は消え、リニアモーターカーだけがやってくる。

甲斐は信玄・温泉地からワインの里へうまくブランドチェンジした。ひっそりとした山国は寺々も立派で独自の存在感がある。鉄もどれも楽しめるが、中央本線はどうなるのだろうか。

参考文献 / 『車窓の山旅 中央線から見える山』山村正光・著 (1985年初版・2017年文庫化、実業之日本社)  
本書は、国鉄車掌で著名登山家でもある山村氏による優れた中央線(新宿ー松本)沿線ガイド。

# ニッポン 懐 拝 見



## 低空飛行続く、2021年レジャー市場

新型コロナウイルスが猛威を振るった二年目、一方で観客抜ききの五輪強行開催。  
2021年レジャーを定番『レジャー白書2022』で見る <(公財)日本生産性本部10月31日発行>

### ●旅行が消えた

レジャー市場全体は55.7兆円と前年より1%アップ。コロナ以前の2019年は72.3兆円だから、完全な不調が続いている<図表>。ここで四部門の見出しと内訳を紹介する。

### ●スポーツは復調

大きく落ち込んできたゴルフが女子ゴルフブームで復活。ゴルフ場・用具共に大きく伸張した。前年コロナで集客が落ちたフィットネスクラブも復調気味。登山釣りも堅調。

### ●趣味・創作／コンテンツ配信続伸

目立つのは有料動画配信で4,860億円に成長。が、ビデオレンタル減と見合い。映画・演芸・コンサートは映画館を除きコロナ影響で前年と同じく低迷。趣味創作で

は園芸関係は根強い。その他のホビー・習い事は先細り傾向が続く。

### ●娯楽／公営競技堅調、酒場・カラオケ低迷

娯楽部門は全レジャー市場の七割を占める。パチンコは横ばい。元気いいのはオンラインゲームで1.3兆円を超えた。注目すべきは公営ギャンブル。一時消えると思われていたがネットとテレビ露出で競馬・競艇・競輪は息を吹き返した。コロナとギャンブルの相関関係は面白い。一方かつて五千億産業だったカラオケは苦境。また外食、特に酒場は絶不調。

### ●観光・行楽／旅行りのダメージ継続

国内旅行たび重なるコロナの影響と行動規制で前年並みに低迷。海外旅行はゼロと観光は厳しさが続く。

(経済アナリスト 中野三郎)

<図表>レジャー市場の推移 (単位:億円)

		2019年	2020年	2021年
余暇市場全体		723,070	552,040	557,600
○スポーツ部門		41,860	35,190	38,940
○趣味創作部門		75,360	68,100	70,050
○娯楽部門		490,410	383,610	383,270
○観光・行楽部門		115,440	65,050	65,340
参考	カラオケ	3,800	1,970	1,440
	外食	148,240	110,880	109,330
	喫茶・酒場・バー	49,670	29,650	21,620
	国内旅行	76,680	37,410	37,010

(日本生産性本部『レジャー白書2022』を元に作成)